

KOEKISHA

公益社ハートフル

Heartful



新型コロナウイルス感染者の減少で通常の生活が戻りつつある中、見えてきたこととは

ライフエンディング コロナ禍をきっかけに変化したこと、 変化しなかったこと総まとめ

新型コロナウイルスの流行から2年が経とうとしている今、ライフエンディングの現場では、葬儀の新たなスタイルや考え方が新たな常識として定着しつつあります。しかし、コロナ禍を経ても変わらなかったこともあります。国内のコロナ感染者の減少により、通常の生活が戻りつつある今、変わったこと、変わらなかったことをまとめます。

コロナ禍がライフエンディングにもたらしたこと

多くの人が集まる葬儀では、特に緊急事態宣言下において、感染対策のひとつとして参列者を近親者のみにするなど、少人数で執り行うケースが増えました。葬儀はコロナの流行前から、超高齢化、社会の価値観の変化などを受け、故人や遺族の在籍する会社や、地元のコミュニティを重視する葬儀から、少人数で執り行う家族葬に徐々にシフトチェンジしてきましたが、その潮流が5年分早まったと言われていています。特にコロナ流行の初期は、全ての人が感染症対策に関する知識も乏しく、故人の訃報を今まで通り伝えて良いも

のか、伝えないほうが良いのか、多くの人が悩んでいました。

このように全てのことが手探りの状況で進んでいく中、コロナの感染者が世界的に急増したことで、喪主となる人が海外から帰国できない、県をまたぐ移動に制限が出たことで、遠方の僧侶が葬儀に来ることが出来ない、遠方の親戚が参列できないなどの問題が生じてきました。

それでも当初は、コロナはすぐに終息するだろうとの見方が多かったため「今は緊急事態だから仕方がないが、いずれ落ち着いたらお別れの会などを執り行おう」といった考えが主流でしたが、コロナ禍が長期化したことで、今できる最善のことをやろうといった考え方に変化してい



ました。

それにより、葬儀をオンライン会議システムで配信、僧侶がオンライン会議システムで読経といった、コロナ前の常識では考えられないような方法を採用したり、

コロナ禍で 変化したこと

- ✓ 感染対策のために葬儀の参列者は少数に
- ✓ 葬儀におけるタブーの境界線が変化
- ✓ 遠方への移動が難しい場合、葬儀に参列できないことも
- ✓ 近親者以外(遠方の親戚、ご近所、故人の友人など)への案内の仕方に変化
- ✓ ライフエンディング全般について周囲の人に相談しづらくなる
- ✓ 病院での看取りがままならないことから、最後のお別れまでの時間が重要に

充分にとることができることも、後悔なく故人を送り出すために重要です。またコロナ禍により感染症への関心が高まったことも、エンバーミングへの注目が集まる要因となりました。

また、人と直接会うことが難しく、葬儀後に大切な人を亡くした悲しみを分かち合う人がいないことから、グリーフケアへの必要性も高まりました。

コロナ禍を経てもなお 変わらないこと

家族葬など、参列者の少ないスタイルに変化しても、葬儀がなくなることはないでしょう。葬儀とは、そのプロセスを通して大切な人を亡くした悲しみを癒すための儀式でもあります。また、故人の尊厳を守り、弔うことも、故人との別れを乗り越える

ための重要なファクトです。コロナ禍は、変化する時代に対応した、新たな葬儀のカタチを生み出しましたが、これは、故人を弔う気持ちといった普遍的な考えがあったからこそと言えます。



友人は、とても気さくで交友関係も広がったから、自分の葬儀には交流のあった方々にお別れをしてほしいと、生前言っていたことが、とても気に入っているの。寂しい葬儀で、悲しんでいるのではないかとすると、胸が張り裂けそうで。



最期にお顔をご覧になって、お別れをされたかったですよね。ただ、ご友人のご家族も、非常に迷われたのではないのでしょうか。

ご遺族から、声を掛けることで、「こういった時期だけお参りに行かなければならないのかしら」と、無理してご参列されるのではないかと、このような時期に声をかけるのは非常識に思われるのではないかと…。ご家族も悩んでいらしたのではないかと思います。

既に、ご葬儀は終わっていますが、故人に向けたお手紙、お花、お線香などを送るなどして故人を弔うお気持ちを現してはいかがでしょうか。



そうですね。友人が生前「仲良しの人みんなに来てほしい」と言っていたとしても、コロナ禍では実現するのは難しいものね。ご遺族も大変だったでしょうね。



ところで、コロナ禍の葬儀は、たくさんの人をお呼びしてはいけないのですか？



コロナの流行から2年近く経ち、私どもも様々な知見を得ました。やはり、交流のあった方々にお別れをしてほしいといった想いのご遺族も多いので、参列者が分散するよう、2部・3部制といった具合に、同時に集まる人数を減らすような工夫をしています。



なるほど。それなら安心ですね。



そのような方法もあるのね。



他にも、遠方にお住まいの方にもご参列いただけるよう、スマホ、iPad、PCなどの端末を使用し、リモート参列のサービスも無償で提供しています。



葬儀をビデオで撮影するなんて不謹慎ではないですか？



そう？ とても便利じゃない？

コロナ禍でなくても、高齢の参列者が遠方から来るのは大変だから、こういったサービスを使うのも良さそう。



確かに、最初は抵抗があるかもしれないのですが、実際にご利用された方からは、モニター越しとはいえ最後にお別れできたのは良かったというお声もいただいています。



私も、友人と同じように最後は仲の良かった友人や、お世話になったご近所の人にも見送ってほしいからその時々で最善の方法でお願いね。愛ちゃん。



わかりました。誠と、直美さんにもきちんと伝えてね。でもお母さんはまだまだ長生きしてほしいので、いつまでも元気でいてね。それより私は、独身で家族がないから、自分のことも考えなきゃいけないかな。



いつでもご相談にいらしてください。

重要ポイント

- コロナ禍で葬儀に参列できなかった場合、お手紙、お花、お線香などを送り弔意を現す
- コロナ禍でも、葬儀に多くの人に参列していただく方法がある
- コロナ禍をきっかけに、リモート葬儀など新たなお別れの手段が生まれている

この人に聞きました！



用賀会館館長、
1級葬祭ディレクター
阪本 さおり(さかもと さおり)

今までの葬儀担当件数は500件以上、「事前相談」「終活セミナー」「家族葬セミナー」などの講師も務める。